

翌朝、庭をそうじするときに、姉さんは、はちがどうしているだろうとわざわざつじの木のところへいって、巣をのぞいてみました。そこには、昨日の親ばちが、やはり一びきで、いっしょうけんめいに巣を大きくしようとしていました。彼女は、はじめてそのとき、一びきのはちの力で造られた巣に注意を向けたのです。

なんと並々ならぬ心遣いと、努力が、その巢に傾けられていることか。たとえば、雨風に吹かれても容易に折れそうもない、じょうぶな枝が選ばれていました、また、巢のつけ根は、さわつても落ちないように、強そうに黒光りがしていました。小さなはちどうして、こんな智慧（ちえ）があるかと不思議に思われたほどでした。

「そうだ、①これを弟に見せてやろう。そして、りこうなはちが、どうして巢を造り、また子供を育てるのに苦心するかを教えてやろう。そうすれば弟は、ここに巢のあることを知っても、けつして落とすことはあるまい。」と、考えたのでした。午後になつて勇ちゃんは、学校から帰ると、庭に出て、一人で遊んでました。

「勇ちゃん、はちの巣があつてよ。」

彼女は弟の顔を見ました。

「ああ、知っている。」

「え、知っているの。」

弟が、どうして、それを落とさなかったろうと疑われました。

「姉さん、つつじの木だろう。お母さんばかりがひとりで巣を造っているだよ。」

「ええ、そうなの。」

「このあいだから見ると、だいぶ大きくなった。あの穴の中に子供がいるんだね。暑いときは、水盤の水を含んでいって、巢の上を冷やしているよ。」

「まあ。」

そんなくわしいことまで、いつ弟は観察していたのだらうとびっくりしました。

しかし、姉さんは、弟が、どんなにそのはちをかわいがっているかを、まだ知らなかったのです。

「君、はちの子を持っていくと、ほんとうによく釣れるよ。」

子どもたちは、日課のように、みんなで川に釣りに出かけました。彼らは、血眼になって、はちの巣をさがしていたのです。勇ちゃんはその話を聞くたびに、庭のはちの巣を目に浮かべました。このごろ母ばちの片方の羽がすこし破れているのを見ると、胸がいたくなるのを感じました。ほかの子供は、どこからか、はちの子をさがして持つていくことがあったが、②勇ちゃんだけは、いつもうどん粉の餌（えさ）を造つて、釣りに出かけたのでした。

【小川 未明 「ある夏の日のこと」より】

問1 —線部①これを弟に見せてやろうとありま
すが、「姉さん」がそう考えた理由として、最も
適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　小さなはちの並々ならぬ心遣いと努力を教えることで、家族の愛情を知ってほしかったから。

イ　母ばちの苦労や努力の結晶が、弟に釣りの道具として使われるのは我慢できなかったから。

イ 母ばちの苦労や努力の結晶が、弟に釣りの道具として使われるのは我慢できなかったから。

ウ　母ばちがたった一ぴきで努力し、智慧を働かせて造った巣を落としてほしくなかったから。

エ 自分と同じようにはちを好きになつてもらい、毎日一緒に観察したいと思つたから。

問2 ―線部②勇ちゃんだけは、いつもうどん粉の餌
(えさ)を造つて、釣りに出かけたとあります
が、それはなぜですか。解答欄に続くように、そ
の理由を文章から十一文字で書き抜きなさい。

から。	